

七百頌般若貝葉写本のカラー画像からわかること

研究員 佐藤 堅正

ネパールリサーチセンター所蔵の七百頌般若貝葉写本のカラー画像から分かることを述べる。七百頌般若の三本ある貝葉写本の一つである。マイクロフィルムのリール番号 B 23 / 15 に含まれる写本である。大きさが横三十一センチ縦六センチの貝葉の両面に、それぞれ五行ずつ文字が書かれている。カラー画像は二〇一二年十一月に撮影された。特徴のある興味深い写本である。

綺麗なカラー画像なので、貝葉の傷みがよく分かる。貝葉の端が折れて取れそうになっていたり、何かのシミが広がっていたりすることが分かる。貝葉の端の繊維がほつれて、文字の書いてある部分にまで及んでいる箇所もある。一九七〇年に撮影された白黒画像と比べると、四十数年が経って傷みが進んでいることが確認される箇所もある。

この写本の特徴のひとつは、修正が多いことである。**pa**と書いた文字を**pa**と書き直したと見られる修正や、動詞の人称・態を修正した例がある。また、5 b 面には、使っているうちに擦れて墨が薄くなって読みにくくなった部分の文字を、上からなぞっている部分があることも分かった。その他に、文字を書き落としたために何文字かを消して、そこに元より多い数の文字を細く書き込む例を示

した。この種類の修正はかなり多い。

次に挙げる特徴は、埋め字が多いことである。しかも、貝葉の b 面の最終行が埋め字で終わる葉が多いことである。四十一葉中七葉が埋め字で終わっている。埋め字の数も多く、第二十三葉 b 面第五行では四十五文字、第十五葉 b 面第五行では四十二文字に及び、一行の半分以上を占めている。書く場所が残っているにも拘らず、何故貴重な貝葉に埋め字を大量に書いたのだろうか。

上記の二つの特徴を、写本に見られる乱丁との関係から考えてみる。乱丁についてはかつて報告した¹⁾。七百頌般若の紙写本十二本の全てに、乱丁のある写本を描写したことによって生じたと考えられる内容の「とび」が四箇所あり、その箇所で文章が繋がらない。その「とび」の箇所がすべて、この写本 B 23 / 15 では貝葉の b 面の最後に来ている。しかも、そのうちの二箇所は、貝葉 b 面の最後に埋め字があり、「とび」が b 面の最後に来るように調節しているように見える。さらに、b 面の最後に埋め字が五字ある第一葉は、前後の貝葉と書き手が違うことも分かる。

この様なことが起き得るのはどの様な場合か。一つの可能性は、複数人で分担して、貝葉単位で描写する場合である。一葉に書く分量が決まっている訳だから、少し詰めて書いた場合には余白が出来てしまつて埋め字を書かざるを得なくなる。これで貝葉 b 面最後の埋め字の多さが説明出来る。また、通常の書写ではなく、特殊な目的の書写だと

仮定する。例えば、書写の師匠の元で弟子が複数人で書写したような場合、弟子が修行中なので間違いが多く、添削のような形で師匠が修正したというような場合を考えてみるのも面白い。

四箇所の「とび」がすべて貝葉のb面最後にあることから、この写本自体が乱丁を起こした写本である可能性もある。あるいは、既に乱丁を起こしていた別の写本を貝葉単位で写した結果、「とび」がb面最後に来た可能性も考えられる。葉のb面右欄外にある葉番号は「とび」を残したまま振られているので、書写された時点で既に「とび」が存在していた、即ち、この写本自体が乱丁を起こした写本ではない可能性が高いと考えられる。

(1) 拙稿「七百頌般若写本の系統について」大正大学総合佛教学研究年報第三十二号三二四頁、平成二十二年三月。